

Editorial

SABS ニュースレター編集委員会

SABS
Newsletter



昨日・今日・明日

前回も書きましたが、奥山先生のご逝去から1年となりました。そして、筆者（檜山）が突如理事長をお引き受けすることとなり、早や1年経ちました。これまで、この項では、先生が様々な分野にわたり、次から次へと溢れる蘊蓄を毎回披露されて居られました。奥山先生亡きあと出来るだけ先生のご遺志を継ぎバイオテクノロジー標準化支援協会（SABS）を続け発展させて行こうと定例会では会員の方々が毎回次々とそれぞれの方々がご専門の蘊蓄を傾けることで少しでも先生のご遺志を継ぎ会員各位の親睦と勉強の一助となるよう努めてまいりました。

前回第74回定例会（5月27日）は、その10日ほど前に筆者が毛虫に刺され、なぜか重症化（？）して入院となってしまう、やむなく欠席となり、皆さまに大変ご迷惑をおかけしました。お陰さまで先週ようやく2週間以上の入院（ほとんど検査に次ぐ検査の毎日で結局大した治療はうけなかったのですが）から解放され、その後リハビリに努め、6月14日現在ほぼ完治したようです。

幸い、5月27日は、荒尾さん他のスタッフのお陰で10人の参加を頂き、2月の定例会でハイドロキシアパタイトの話をして下さった若手の現役HOYA Technosurgicalの小林伸太郎さんに「抗体医薬」を中心にハイドロキシアパタイトのお話の続きをお話し頂きました。

抗体医薬とはどのような医薬かのお話から始まり、その歴史、今までの医薬の主流である合成化合物と新しい抗体医薬との市場のバランスを含めた世界の市場状況、製造方法およびその問題点、また次世代の抗体医薬はどのようなものか、また世界的に遅れを取った国内の製薬会社がどのような戦略でこれからやっていくのか等々のお話に始まり、演者の会社の開発した新型アパタイトビーズを使った抗体の精製法など大変興味あるお話だったようで、聞けなかったことは筆者にとって誠に残念でした。

次回の第75回定例会（6月24日）は、昨年第69回定例会（12月11日）に「“みどりの香り”の研究」という題でお話して頂いた山口大学名誉教授畑中顯和先生に昨年のお話の続きということで再びお話頂くこととなりました。畑中先生は奥山典生先生の中学・高校の同窓生で奥山先生は何度もご講演を依頼されたとのことですが、遂に先生のご存命中に実現できなかったことは前回にもご紹介いたしました。

先生は昨年植物の多彩な二次代謝のお話をされました。先生の業績は実に膨大でこれまで様々な代謝経路を解明されて来られました。そして最近は最終産物の香り物質がどのように人間に影響するか、それも良い意味での影響特に脳に対しての影響についての研究をされていて現在も継続されているとのことでした。実はこの部分は前回時間の関係で触れられず、いずれ詳しくお話頂く

連絡先

住所：
〒173-0005
東京都板橋区仲宿 44-2

blog:
sabsnp.org/blog

email:
office@sabsnp.org

よう我々からお願いし、ようやく今回実現されることとなったわけです。

今回、「立体化学構造と生理活性」という題でお話しされます。みどりの香りとヒトの官能/心理・生理というお話とみどりの香りの害虫防御因子、更にはまたブテナント（ノーベル化学賞受賞）の Sex pheromoneなどのお話もされるということです。

畑中先生は、これまでスエーデンのノーベル財団での招待講演もされるなど、ノーベル賞に近いかもと思わせる素晴らしいお話になると大いに期待して居ります。

先生のご略歴は以下の通りです。

1962年 京都大学 大学院・農学研究科博士課程・農芸化学専攻修了（農学博士）、京都大学（化学研究所） 助手
65年 コーネル大学・博士研究員、68年 山口大学農学部 赴任、
72年 同教授
88年 山口大学 評議員
94年 山口大学を定年退官されるまで、鳥取大学大学院農学研究科教授併任、京都大学大学院農学研究科非常勤講師、ミュンヘン工科大学 客員教授を経て、
2001年まで東亜大学教授。
現在山口大学名誉教授、みどりの香りのノーブルフォーラム研究会代表。

受賞歴：

1968年 日本農芸化学会賞（奨励賞）「青葉アルコール反応に関する研究」
1993年 日本農学学会賞「植物起源の“みどりの香り”の発現と生理的意義の解明に関する研究」
1983年 中国文化賞（学術賞）
1993年 読売農学賞

（理事長 檜山哲夫）